

教育との出会い

周 郷 博



ぼくは、今日ここへくるのに小田原へ出て新幹線で東京駅を回って来ました。小田原でも、東京に着くといっそう、土曜日だし、やたらに人が大ぜいいて、遊びに行きたいけれど、みんな、男も女も、とくに女の顔が「つくられた（つくり過ぎて、その人の顔がこわされている）」のにびっくりしました。東京駅でタクシーに乗ったら、タクシーの中にまでホテルの広告がくどく出ていて、一泊一万三千円もする。こんなに商業―商社利益ばかり振り回され、その利用に身を任されっぱなしの国なんて、ほかにはどこにもないように思

います。銀行強盗事件がつきつきと起こっているけれど、これは自然の成行きだと思えますよ。世の中、お金しか、その「お金」に「寄せる」しばしの「安全」「たのしみ」しかないふうですから……。

こういう今の状態を、どうしたらいいかというと、「教育の問題を考えて話すこと」ですね。それは、人間の未来について語ることであり、過去について真面目に考え、環境―広い意味での―と人間の関係を考え、人間の生活―大昔からずっと続いている―について考え、その上で未来に対してどう

いうふうに責任をとるか、ということ。『教育との出会い』それは「人間との出会い」と一つのものであるはずだからです。

昨日、パリの友人からの手紙を受取りました。このペーターという人はO E C Dに勤めていますがとても日本が好きで、もし日本に職があれば日本で働きたいと思っている人です。子ども時代をすごした北ドイツで日本のことをいろいろ聞いて、とても印象がよかったです。その手紙を読みます。

「今、この西ヨーロッパではいろいろな問題をかかえています。まず『Jobs』、仕事がないこと、そのためにどう生きていかかわからない若者たちの犯罪がふえたこと、中年近くなった人々の、内的生活が空白になった、年寄りを捨てる―老人遺棄ということも多くなっている、それに、戦争に対する恐怖、心配、など」だといっている。

ぼくはこれを読んで、前にヨーロッパに行った時も多少感じたことでしたが、ひどくなったんだなあ、ショックでした。そして、「日本の新聞を読むと、日本でもいろいろな状態が、能の世界とか、桜の花がきれいに咲いている風景とか、

想像していた日本とは違ってしまったらしい、ということがわかります」ともいっています。

古来、プラトン、孔子、コメニウス、ベスタロッチ……、たくさん有名な人たちがいて、教育について考えてきました。教育という問題は解決できませんでした。それほどむずかしい問題なのです。ぼくは、今まで「教育の問題を考える」というと、自分の考えのせまい操作の中でやりすぎたのではないかという気がします。一人の人間が、どう生れ、どう生きるかは、その人間に「そなわっている」部分があるのではないかと思うのです。今年、三月十四日に生誕百年を迎えるアインシュタインは、学校も、いわゆる「よい成績」ではなかったし、「学校秀才」でも「よい生徒」でもない、先生の「おぼえ」のよかった子どもでもなかった。一九〇五年に特殊相対性理論を発表して一躍有名になりました。これは「教育の結果」ではなかったのです。人間の天性とか運命は、先生にはわかりません。それなのに、教育をしてこうすればこうなる、などというのは、人間を尊重していることでしょうか。「不確実性の時代」で有名なガルブレイスも、教育について次のようにいっています。

「経済的利益を目的にして教育をやつてはいけない。社会はどんどん変つていつているのだから」また、

「ある目標をたてて、この子をこういうふうにしようとしたら、そういうもくろみは大抵裏切られるものだ」と。

こうしようなどといって、天才になつたためしはありません。天性と運命—こういつた人知を超えたものを考慮に入れない教育は教育とはいえないと思います。そしてこれは、深い意味で人間を信じることです。日本では、人間と人間が信じ合つてゐるという関係は、ますます少なくなりましたね。

人が一緒にゐる意味がなくなりました。この意味は、出会いをするということ、お互いにわかり合えた喜びは自己を超えた喜びです。これが日本にはなくなつてきてゐるのです。

ヨーロッパでいま一番信頼されてゐるといわれる、オランダの老教育学者ランゲフェルトの著書には「教育は、子どもが、本当に信頼できる大人と出会つた時に生起するものだ」とあります。この「信頼できる大人」というのも日本ではあまり見られません。人間の子どもが、人間を信頼するといふ経験をするのは四歳位までです。そのころは血液も大人の倍くらい早く回つて体温も高く、眼も水晶体が美しく、まわりを美しく見ています。動植物、宇宙、すべてを含めた世界を

美しく見てゐるのです。そういう時代に、世界を愛し、信頼することを経験させなければいけないわけです。ところが今日本では、食物を食べすぎたり、テレビを見たり、勉強ばかりしてゐることがおおいし、子どもの体温が下つてゐるそうですね。

ハーバート・リードの自伝にあつたような美しい風景は、日本でもイギリスでももうなくなつてきています。風景というのは、何でも無いもののように思ふかもしれませんが、これは大切なものなのです。人が勝手に作つたものでもないし、かといつてそこになつてゐる一つの石ころでもない、特別な意味で、一つの世界です。パリの本屋でも、風景(Paysage)という題のついた本が多いのに驚きました。それがなければ、人間の生活は生活になり得ないところから、こゝうなつたのではないかと思ひます。ぼくは東山魁夷さんをととても羨しく思ひます。ノスタルジイのような、一つの世界—風景を画いていて、その風景は、人間がどう生きてゐるかといふことを教えていると思ふのです。川の流れ、人間の労働してゐる姿など、それがなければ生活はないのです。子どもは、一つの世界—仮説として風景—をつくる生物なのだと言フゲフェルトがいつてゐます。そこが、ダニなどと違つるとこ

るなのです。ダニは、温血動物で毛の生えている生物が下を通るのを何年でも待っていて、その毛の中へとびこむのです。しかし人間は、人間の生きている世界、画のような風景をえがき出すことのできる生きものです。そして教育は、大人とは違う、子どものもっている風景を保たせるように援助してやるという役目なのです。自分のまわりのもの、すべてを含めた風景を子どもがつくり上げるのは、二、三歳のころです。そのころテレビを与えれば、子どもは動くものが好きですから当然それに熱中します。人為的な刺激過剰によって「育つ」若い神経を破壊してしまいます。

ルドルフ・シュタイナーという人の教育「シュタイナーの学校」の考え方が日本でも、モンテッソーリとならんで注目されてきましたね。そのシュタイナーが「人間の発達のリズムを三つの層」として、例えばこんな見かたをしていることに注意してみたいと思います。

「眠っている状態 (Sleeping state of mind)」

「夢みている状態 (Dreaming state of mind)」

「目覚めてくる状態 (Waking state of mind)」

これは、人間の発達のリズムを成している三つの層です

が、私たちの日常生活にも、この三つの層は健康なものリズムとして働いているものです。赤ちゃんはまだ眠っている時間が長い。胎内の十ヶ月の激しい形成の「あとを受けて」からだは速い成長をとげていますが、人間の精神 (mind) は「まどろんでいる」状態——しらじらと夜が明けかけた状態です。三歳——そうして七歳で乳歯が抜けかわって永久歯が出てくる。そこが一つの節で、「自我」というものが、未だやわらかいかたちであらわれてくる。この七歳と、つぎの十三、四歳——ここからだにははっきりした変化が起ります。この七歳、十三、四歳という二つの節を軸にした、二十一歳（ここで、からだの成長はほとんど完成する）に及ぶ三つの層が発達というもののリズムの根幹を成しているとみるのですが、十四歳になってやっと「考える——目ざめている状態」に達するといっても、そのまえの「眠っている（まどろんでいる）状態」「夢みている状態」がその下地になっており、意外な大切な積極的な意味をもっていることを重視しているのが、その特徴です。

長いこと葉であったものが、ある時、それが花になる、これは変ること——メタモルフィズム（変成）ですね。人間も同じで、赤ちゃんがだんだん変って大人になる。これは本能

的なもので、シュタイナーの考え方には基本的にはこの考え方があります。生物学者であったピアジェも、死が近くなつたところに「知能は本能を根にして出てくるものである」と面白いことをいっています。そして花という中国の漢字をよく見てみると、実によくそれを現わしています。草が花に「＋＋」で「化する」、変わるわけです。その花―中国の発音は「ホワ」です。はやくこの「化」―花が咲けばいいのでもない。およそ予定はたたないのです。何か外からできることは、葉に虫がついてまわりの草まで全部枯れてしまうということのないようにすることぐらいです。そしてよい土とよい風景の中においてやることです。

シュタイナーの三、四歳の子どもに対する考え方は、モンテッソーリのそれと殆んど同じです。モンテッソーリはこの時期を *absorbent mind*―まわりの世界と自分が分離してなくて、まわりの世界をいつのまにか「吸収する」時代だといっています。このようなシュタイナーの見かたは「子どもの中から子どもを見ていた」見かたといえます。人知学 *anthroposophy* は人間をふかく哲学する（考える）ということで、彼は本当に子どもを「愛して」いました。人間は、上の方から知、情、意にわけられますね。誰も「意」が頭の中

にあると思う人はないと思います。そしてこれは発達の順序にもしたがっています。赤ちゃんの頭はだから大きいですね。体の発達は―このように「遠心的」―アタマから胴体、手足という方向で発達する。しかし、精神的なもの―逆に「求心的」に―手とか足とかの感覚がのびて発達していった。それから心が、そういうものを下地にできていくわけです。アインシュタインのような偉大な人もこうして形成されていったでしょう。しかし今は、逆になっていますね。今の子どもたちは、感覚の世界にふれることなしに、「夢みる状態」も省いてアタマだけに何やら「知識」だけつめこまれて、花の咲きようなない草のようになっていようです。

赤ちゃんは「意識」からいえば「眠っている」ような状態でお母さんの働く姿、チヨウの舞う姿などを夢見ます。そして自分の世界を「つくりあげて」いきます。まわりの世界を模倣し、まわりをとり入れている時代が、*Sleeping state of mind* の時代で、この時代に人類の文化をうけつぐ人間らしい人間の土台ができます。しかしその模倣の相手がいなければなりません。次の時代に必要なのは、「權威をもった」大人です。そして大人が信じられることです。先生が好きて、先生を模倣したくなる、そんな幼稚園の先生が必要になって

きます。そして十四歳すぎると脳が完全な形になり、同時に足の指の骨が完成して少年期を迎えるのです。こういう段階をへて成長していかないと、大人にしても、環境に対しても信頼ももてないわけです。

シュタイナー、モンテッソーリが注目されているのと同じように、ヨーロッパではヨガ、禅、柔道、空手、ハリキユウなどに対する関心が高まっています。しかし、ヨーロッパのような先進国が東洋文化に興味をもつもちは、日本が、ただ西欧文化（文明）を模倣し、追いつこうとしたのとはちよつと違うようです。異質文化の中から何かを見つけようとしている！今までのヨーロッパと違うことを考えよう、というところが起こってきているのです。面白いことに、ほくが偶然ロスアンゼルスで見つけた、イギリスのハリキユウ医学会会長という人の本には、「ヨーロッパでハリキユウを理解するためには、シュタイナーのように、人間のことを「内側から見る見かた」をするのがいいのではないか」と書いてあります。

中国の考えかたもまた面白いものです。中国では「氣」は天地全体に充滿しているものであって、人間は呼吸すること

によってそれを体内にとり入れているというのです。そしてその「氣」は「ウ、チと発音するらしいけれど、「ウ」のさかさなのです。面白いでしょう。この呼吸というのは、リズムをもっていて、それで血液が体中にゆきわたるわけです。シュタイナーの学校では、先生も子どもも一緒に、大きく呼吸をしたりするそうです。

イワン・イリイチという人もとてもいろいろな経歴、学識をもつ人ですが、今はメキシコにいます。このイリイチは、今までのような学校ではなく、「人間というものから」学校を考えています。これからはこういうことが起こってくる時代だと思えます。去年京都では、「アジアの人たちの「内発的、知的創造性」を考える」国際会議が開かれました。ヨーロッパ風の学校を作ってそこへ子どもをとじこめるというのではなく、非ヨーロッパ世界でこういうことを考えるということ、世界のバランスのためにも重要なことでしょう。と同時に、子どもの、「内側から育ってくる」知的創造的な力をどういうふうにするかということを考える時期に来ているのです。運命、天性によって、子どもたちがどんな花を咲かせるかは、教師の力が及ばない。「計算を超ええるものがある」のだということを見つめて、教育は転換していかなければなら

ないのだと思います。子どものうちなる力を主体に、教育を
考えなければならぬ時代に来ているのです。これは医学も
同じで、健康を創造するのは当人なのであって、それ以上医
者は深入りをしてはいけないうのでしょう。急場の時に薬を与
えたりして助けることはしても……。教育が子どもの幸福を
創造する―してやるといふ考え方は、もつてのほかだと思ひ
ます。そしてこれからは、西欧文化と東洋文化がいかに助け合
うべきかということも、重要な問題になってくるでしょう。

最後に、今日の話に関連して、一昨年亡くなった野口晴哉
という人（整体協会の創設者）の大へん味わい深い語録を読
んで終りにします。

これだけの仕事をしたら疲れると思つてゐる人は、疲れ
る。

到底自分にはできないと思つたことは、できない。

しかし、一心にやりたいと思ひ込んでやつて行く人は、す
らすらと為し得る。

やれると信じてゐる人は、戸惑う。

体力ができたならこういうことをすると考へてゐる人は、い
つになつてもやれない。

自らやり得ると確信して行ふ人は、失敗する。

ただ一心に、こういうことをするのだと行動してゐる人
は、体力が湧いてくる。

途中は省きますが、けっきょくは「生きてゐる人間の裡うちの
力」を振作すること―その「裡の力」は「無限なるものに連
つて使つて減るといふことはない」といふのが野口さんの
「医学」の帰着点のようです。私はあの「エミール」や「告白」
を書いた時期のジャン・ジャック・ルソーが、ひどい持病の
尿道狭窄に苦しめられていたことを、この語録を読んでいて
思ひ出しました。この「裡なる力」とは何でしょうか？「医
学」は人間の長い歴史の中で、人間が「人間自身」を考へた
知恵を中核にしてみました。―「文学」も、それをもつと幅
ひろく問題にしてきたわけでしょう。いまの教育はあまりに
お粗末で、「教育との出会い」がない子どもこそ、そうした
「教育との出会い」を内心希い求めていて日々失望し、「人間
でないもの」にされていつてゐる、そういう感じが深まりま
す。

（おわり）



これは、みどり会研究会で行なわれた講演のまとめに、周郷先生ご自身が書き加えて下さったものです。久々の講演は非常に熱がこもり、伺う方も一生懸命でした。

この中でもふれられたモンテッソーリの教育について、周郷先生が『人間らしき進化のための教育』という訳書をお出しになりました。著者マリオ・M・モンテッソーリはマリヤ・モンテッソーリの孫にあたるオランダの精神医であり精神分析学者でもあります。そして編者ポール・リリヤード夫人は、アメリカのモンテッソーリ教育の権威です。とかくモンテッソーリ教育というと「教具」その他の方法が表に出て、見落とされていたような「モンテッソーリ教育の基本原理」についてわかりやすく、くり返しのべられています。というのも、これは著者マリオがモンテッソーリ教育の実践者や父兄のために、各地で行なった講演をもとに編まれた本なのです。

周郷先生もあとがきでふれられています。モンテッソーリの「二つのいっそう革命的な見かた」すなわち「人間の人格形成において不可欠なものとしての教育の見かた」、もう一つ「人間と宇宙との関係（かかわりあい）について」の章は、これが七十年前に唱えられていたとは驚くばかりです。現在の教育が「モンテッソーリの考えていた教育」とは大分はずれた方向に向かっているのではないかと……と考えさせられることのまことに多い本だと思います。

発行所 ナツメ社

(赤間峰子)